

## 『開基日隆大聖人縁起』について

三 浦 成 雄

宝曆十二壬午歳（一七六二）二月、高岡・本光寺の十四世、嘉伝院円承日諱（天明五年五月十日寂、年令不詳）が著わしたこの書は、嶋村誕生庵の常住物として伝えられているもので、天保十一子歳（一八四〇）三月、両備八品講の田中春治が、これを書写している。

この書は、昭和四十七年（一九七二）の夏、「両備八品講」の調査を行うため、岡山市牧山に当時在った「本妙院」（現在は岡山市菅能寺の境内に移転している）の宝蔵を拜見させていただいた折に見出したものである。

宝曆十二年の頃は、両山四十八世日憲（忍定院、一六九四—一七七〇）によって、漸く本門八品教学が整備された時期で、台学偏重によって衰退していた八品教学が高揚されたことによって、日隆聖人の御伝記が登場する背景がそこにあることは充分に考えられるところである。

この書の終りに、日隆聖人三百遠忌（正当は一七六三年）を迎えて、本門八品の広宣流布を願ひ、

「縁起こまごまにありと雖も、諸国の参詣俗男俗女は見るいとまあらず、今幸いに略してこれを見せしむのみ」

と記されている如く、日隆聖人の御一代を一人でも多くの人々に知らせるために簡略なものを作ったと著者の意図が述べられている。

『開基日隆大聖人縁起』について

このなかで、日隆聖人の生誕を至徳元年（一三八四）、御入滅の年令を八十一歳と記されているが、これについては、日隆聖人の著『開迹顯本宗要集』に記載されている聖人の年令によって、至徳二年（一三八五）の生誕、八十歳御入滅が正確であり、文化八年（一八一―）、両山六十四世日芳の著である『開祖徳行記試評』によって指摘されている。これ以前の記述は先に挙げた年号と年令が使われていたようである。

ちなみに、「両備八品講」は「浪華八品講」創設者事妙院日然の弟子となった土佐藩士永吉敬助が備中（岡山）富吉の地に興した講中で、牧山の「本妙院」は第三代講頭田中熊吉の建立になるものである。

田中春治がこの書を写したのが天保十一年三月と記されている。

日然が顯本寺の住職になったのが天保元年（一八三〇）であるから、両備八品講の歴史からみれば、極めて早い時期に写されたものであることがわかる。

今回興隆学林専門学校の紀要を発刊するにあたり、日隆聖人研究の一資料として、菅能寺様の御諾しを得て掲載させて頂いたことに対し有難く御礼申し上げる次第である。

猶、高岡本光寺住職沢田益隆上人にご協力をいただき、浄写にあたっては、学林教授大平宏龍先生に助言をいただき、宗学研究科二年和田晃尚君の助力を得たことに感謝します。